

P-11

クッチャロ湖学生環境サミット（CASE1）について

- 平田太良（東京農業大学地域環境科学部造園科学科）
- 白銀 頤（東京農業大学地域環境科学部造園科学科）
- △栗田和弥（東京農業大学地域環境科学部）

地球規模での環境問題が盛んに取沙汰されるなかで、最近では観光庁が発足されるなど、環境ベースの地域活性化へ向けて国を挙げて動き出している。そんななか、2008年9月1日から同月8日に北海道浜頓別町で行われた「クッチャロ湖学生環境サミット」（以下、CASE1）を紹介したい。

財政破綻予備軍とされた浜頓別町だが、幸豊かなオホーツク海に面し、もとより今回の対象地となったラムサール条約登録湿地であるクッチャロ湖をはじめとして、環境資源が豊富にある。そのクッチャロ湖の湖畔林の一部を大同特殊鋼株式会社が社有林として保有しており、CASE1はその大同特殊鋼株式会社をはじめとした数々の企業や各関係省庁の協力もあり、「人と地球の付き合い方」をテーマに、大学生85名が浜頓別町の未来を見据えた提案を地域住民へ向けて行った。

今後のCASEは、2010年に名古屋で行われる生物多様性締結国会議（COP10）に向け、湿地の持つ生態系の豊かさや多様さを再評価・再発信していきたい。

P-12

輪島市三井町におけるワークショップとその効果について

- 松島由佳里（東京農業大学地域環境科学部造園科学科）
- △麻生 恵（東京農業大学地域環境科学部）

近年、「文化的景観」の制度が成立し農村景観に対する関心が高まっている。そのため地域固有の景観の保存やその活用方法に注目が集まっている。そこで景観の特性を把握し、評価することや地域住民の意識を高めることが必要となってくる。

対象とする石川県輪島市三井町には、地域の特徴を表した土地利用が見られる美しい伝統的な農村景観がある。ここ三井町に関しても文化的景観保全の動きが見られる。

東京農業大学造園科学科自然環境保全学研究室では一昨年、文化的景観選定を視野に入れた保存・活用の方向性や課題を検討した。そこで地域住民との関わりや意識向上が必要であると考えられたため、昨年には地域住民と地域の景観が持つ魅力について話し合うためのワークショップを開催し、魅力マップを作成した。また、今年は昨年のワークショップで出た魅力をカタチにするためのワークショップを開催し、地域住民と地域の魅力を活かしたグリーンツーリズムを考えた。

今回は石川県輪島市三井町で行われたワークショップの内容と、その効果について発表する。